

「描いた約束」

サラサラと男がメモにペンを走らせるのを、リンはなんとも言えない気持ちで見つめる。手持ち無沙汰を紛らわせようと口内のキャラメルを舌でつつくが、長く一箇所に置いてあったせいで、上手に動かすことすらできなかった。

「……ああ、すまないな。つい色々と考え込んでしまった」

「……いえ、大丈夫です」

上手い返事など思いつかないリンは、もごもごとキャラメルで膨らんだ頬のまま答える。……レンならもつと上手にお返事できたでしょうに、と双子の兄を頭の中で思い浮かべるが、別の依頼で動いている兄が直ぐにここに現れるわけもない。何も言えないまま、キャラメルが溶け出して甘くなった唾液を小さく飲み込んだ。

お菓子を口いっぱい頬張るリンのそんな姿はどこからどう見ても、ただの……それこそ、実年齢より幼い少女にしか見えない。それが余計に、男の顔に浮かぶ感情を

苦くしてしまう。

「……すまない」

「……？」

どうして何度も謝るんだろう、と眉を潜めるリンに、男は小さく首を横に振った。

「……いや、先日キミに対して、キミも俺の守るべき国民だの、無茶をするな、だの色々と偉そうに言ったくせに、俺は結局何も出来ず、こうしてキミ達十三班が帝竜を討伐した報告を後から聞き取るだけだ。……付けた階級章が恥ずかしい……」

グツと溢れ出る自己嫌悪を抑えるように、男は自分の服を強く握りしめた。言葉にならない声の代わりに、男の胸元で服がグシャリと痛々しく鳴る。顔を顰める男の階級は一佐だ。平時の日本であれば、いわば幹部クラスと呼ばれる部類の階級であり、それを証明するように男の肩には傷の付いた階級章が鈍く光っている。幾百もの部下を取り纏め、各地の災害救助に何度も尽力した。そんな自負が男にあるからこそ、余計に今の何も出来ない自分の状況に心を乱しているのだろう。

「……シキシマー佐」

含んだキャラメルを懸命に噛んで飲み込んだリンが、座ったまま真っ直ぐにシキシマーを見上げる。相手の気持ち慮って、自分の気持ちを言語化する。今までレン以外の人間とともに接してこなかったリンにとって、それは苦手な分野の一つだった。……けれど思わず零れ落ちたであろうシキシマーの本音を聞き流すなんて真似、今のリンにできるわけもなくて。

「……ううん……その……」

「……」

必死に自分の思考を言葉にしようとするリンの姿に、シキシマーも顰めていた顔をどうにか通常へと戻そうと努めた。真顔ですら少し厳しい印象を持つシキシマーと、幼い顔立ちでウンウン頭を捻るリン。対面する二人はだいぶ悪目立ちしていたが、生憎とそれに気付く余裕は互いになかった。

「……確かに、シキシマー佐は……ううん、自衛隊は、ドラゴンは殺せないかもしれ

ません」

それこそついさつき対峙した帝竜の姿をリンは思い出す。死者を操る冒瀆的な帝竜。死者への尊厳だの人の最低限の権利だの、小難しいことはあまり考えたことのないリンですら、嫌悪を隠せない出来事だった。饴えた臭いへの忌避感とかそういうのを別にしたとしても、腐った滲出液を滴らせながらこちらに迫る死者を斬り壊したのは、リンにとつてもなにか超えてはいけないラインを超えてしまったような、そんな気分を抱かせていた。

倫理観が低いリンですらそうなのだ。もしあの帝竜と戦ったのが、真つ当な大人の集まりである自衛隊ならば。ただでさえ感情を抑えきれなくなっている堂島リンだったら。きつと操られた同胞の姿に動揺を抑えられず、指揮を乱し被害を増やす一方だったろう。……いや、その前に、純粋な戦闘力不足で殺されていたはずだ。そういう意味で言えば、シキシマの言う通り自衛隊は「何も出来ない」存在なのかもしれない。

「……でも、私は貴方達がいてくれて良かったって、何度も思いました」

池袋の作戦で、文字通り血反吐を吐いて自分の気持ちを一誓いを吐き出す彼らの姿は、情緒に乏しいリンの心にも深く突き刺さった。死にたくないと怯えて震えて泣いて、それでも、見知らぬ誰かを守るために自ら踏み出せる彼らは、リンにとって何も出来ない存在なんかじゃなかった。

「……池袋で命を懸けて戦ってくれた人達も、私を守るって言うてくれた貴方も、私は本当に……」

少ない語彙力を片っ端から手に取り精査するように、リンの碧眼が忙しく右に左に動く。なんて言えば相手を傷付けないだろう、どの言葉なら一番今の自分の気持ちに正しいだろう。疑問ばかりが浮かんで消え、直接的な回答は一つも生まれてこない。その事実気付いたリンは小さく唇を結んだ。そしてそれから、意を決したように口を開く。

「……本当に、とてもすごい人達だって思ってます」

「……っ!!」

リンが必死に続けたその一言に、シキシマの喉が小さく引き攣った。弱いと自嘲した相手に、相手よりもずっと強い人間が貴方はすごいと称える。それは音だけ聞けば、一種の煽りの様な危険性を孕んだ言葉だった。……だがシキシマの瞳に映るリンの碧色は、大きくそれを否定している。

「貴方達は私やレンみたいに、たまたま戦えるだけの特殊な体だったわけじゃありません」

平和な時から訓練を欠かさず続けて、立派に鍛え上げられた自衛隊の体。見た目だけ見れば、どう考えても細身なリンやレンよりもずっと逞しいだろう。

だがそんな彼らであっても、電磁砲の攻撃に耐えられず、何十人も殉職や重症の目に遭った。それはキリノが作った特殊兵装である盾を用いてもだ。威力を殺しきれず骨が折れた者、伝わる熱で皮膚を焦がした者。あの池袋戦で無傷だった者など、作戦に同行した自衛隊には一人もいなかった。

「そして草間さんみたいに不思議な力があるわけでも無いです」

炎や水を操ることが出来なければ、アキラの様に治癒能力を持っているわけでもない。リンの目に映る自衛隊は、特別な力を持たない本当にただの凡人の集まりだった。

「——だからこそ、私は貴方達がすごいと思います」

尊敬する、そんな表現こそ思い浮かばなかったリンだが、真摯にシキシマを見る顔にはその思いがありありと乗っていた。

自分は特別ではない。奇跡はそう起きない。

そう分かって知っていて、それでも守るために戦う事を決めた彼らの姿は、ナツメに言われたからと流されて戦っていたリンにとって、ひどく輝いて映った。

「……それに」

そこまで真っ直ぐにシキシマを見ていたリンが、不意に戸惑うように視線を外す。より一層念入りに言葉を探した結果、ようやく小さな答えを口に乘せた。

「……私、シキシマ一佐に、キミも守るべき人だ、って言われた時、すごく嬉しかったんです。……レン以外にそんな事言われたの初めてだったから」

リンの知る大人の代表と言えば、リンを妻の身代わりにしようとして画策していた父親と、十四歳に過ぎないリンを使えるからと戦場に送り込んだナツメなどが上がる。レンが言うところの「利用ばかりしてくるクソみたいな大人」ばかりだ。

……厳密に言えば、キリノやガトウなど、ある程度は真つ当な大人達は多少の気遣いを示していた。だがどうしても、彼らの根本にはリンとレンがS級であるという事実が根差している。そうなれば必然、双子を守るべき子供だと露骨に扱う事もできなかったのだ。

そしてなによりも。彼らからの、子供への気遣いを内側に包んだ大人扱い、といった複雑な感情はリンには伝わらない。表面上の思いだけ受け取ってそれでお終いだ。こればかりは、キリノとガトウの読みが甘かったと言えるだろう。そんなリンだからこそ、分かりやすくはつきりと伝えられたシキシマの言葉が心に残った。

——私を守るべき人だ、って言った。もっと頑張れ、じゃなくて、あんまり無茶するな、って言った。……それなら彼はレンと同じ。

「……私の事を大事にしてくれてありがとうございます」

「ッ……!!」

ふにやりと相好を崩す少女に、シキシマが大きく息を飲み込んだ。

(中略)

「……リーダーちゃんはさあ」

リーダー。本来であれば統率者という意味合いを持つその単語に付けられた、ちゃん、という軽々しい敬称。しかもその呼び方をテーブルに肘をついたまま行うもんだから、客観的に見たレンはわりと態度が悪かった。だがそれに気分を害した様子も無く、リーダーちゃんと呼ばれた女性はレンに視線を向けた。

「私に何かご用事ですか、レン様」

キリっとしたともすればキツイ眼差しがレンに届くが、彼女が自分に敵意を抱くような人間ではないことはレンも重々知っていた。そのため突き刺さるようなその視線を軽く受け流す。

「んーん、ご用事って大それたもんじゃないけど……。なんでボクら十三班とかアオイちゃんのこととか、ヤになんなのかなー、って思っただけ」

ほら、今もボクの銃をわざわざ手入れてくれてるわけだし？と続けるレンは、細い指先で女性の手元を指さした。そこには細かく解体されたレンの銃があり、嵌めている女性の手袋は機械油などで黒く汚れている。その汚れがどれほど落ちにくいかは、普段手入れしているレンはよく知っていた。自分から名乗り上げるには随分と酔狂な業務だ、と碧眼を細めるレンに、女性は微かに眉を寄せる。

「嫌に……ですか？」

「そ。この間だってアオイちゃんにチョコバー持ってきて、ってお願いされて、探し回るのがチョコー大変だったみたいじゃん？」

最終的に自衛隊の補給部隊の人間からどうか受け取ったようだが、それまでの探す旅は相当過酷な様だった。頼んだアオイですら、受け取る時に気が引けた様子だったのだから。

「今は今でさ、任務でも無いのにボクの銃を手入れしてくれて。……うらやましいって言った相手にそこまで尽くすの、矛盾していない？」

作業班のリーダーとして、ムラクモの一人として。今まで邁進する女性の姿を見てきたレンにとって、女性が自分達に危害を加える事は無いと分かっていた。何故ならドラゴンを討伐するのに十三班や十班が不可欠なことを、彼女自身よく分かっているからだ。

……だが逆に言えばそれだけだ。わざわざアオイの望みを叶える為に走り回る必要も、任務で疲れたであろうレンの代わりに銃の手入れを申し出る必要も無い。その行いの根底には何がある、とレンが口元に薄く笑みを刷けば、それを受けた女性は寄せていた眉を解いた。

「……なにも矛盾しておりませんよ、レン様」

鋭い目付きとは正反対の柔らかい声音がレンに降る。普段はビシバシと部下に指示を出す彼女とは打って変わったその響きに、それも作戦だろうか、とレンは捻くれた心でひっそりと思う。

「確かに私は貴方達がうらやましい。なにせ私には帝竜を単独で討伐するような実力も無ければ度胸も無い。……いや、帝竜だけではありません。きっとアオイ様やガトウ様がなさってるような、普通のドラゴン討伐だって無理でしょう」

さもありません、とレンは軽く頷く。それは決して女性を馬鹿にしている訳ではない。ただ事実を事実として認めただけだ。

いくらムラクモに所属していようと、戦闘の経験が多いガトウや、天性の才能を持つS級のアオイと同じことを、一般人……というには鍛えられているが、それでも普通の域を出ない彼女ができるわけがない。そしてそれは総長であるナツメもよく理解していた。だからこそ、彼女はあくまで作業班のリーダーなのだ。

「……うらやましいはさ、妬みに。妬みは憎しみになるもんじゃないの」
思わずと言った様にレンが漏らしたその言葉に、女性は目を丸くした。本郷レンとい
う少年が吐くにしては、あまりにもネガティブな言葉だ。

常から笑顔を絶やさず明るく振舞う彼は、十三班の中でも外でも緩衝材として機能
していた。彼との心的距離が近くなれば多少のえげつなさを匂わせることもあった
ようだが、女性にそれを見せたのはこれが初めてだ。

それを彼の仲間と認めてもらえたと喜ぶべきなのか、純粹に猫を被れないほどレン
が弱っていると考えるべきなのか。どちらか一瞬迷った女性だが、答えの知らない問
いを抱くのも時間の無駄だと即座に切り捨てる。今はただ、発した言葉を後悔するよ
うに目を伏せるレンと向き合いたかった。

「……それが無い、と言えば嘘になるかもしれせん」
努力では到底裏返せない事実。

——自分は弱い。自分は選ばれた人間ではない。自分は……特別になれない。

何度も考え何度も辿り着いたその結論に、女性は笑みに苦みを混ぜた。分かり切った答えとはいえ、明確に目の前に出されれば良い気分ではなかった。人間として当然の反応だ。

もし女性が、そんなままならない事実を煮詰めて煮詰めて、もいっちょ煮詰め続けていけば、それは確かにレンの言う通り、妬みや憎しみに発展していたのかもしれない。人は一人で鬱々考える時ほど、ネガティブに進みやすいのだから。だがしかし、女性は混ざった苦みを外に追い出すように頭を横に振る。そして苦みの代わりに、諦めを練り込んだ笑みを浮かべた。

「ですが、無い物は無いのですから。仕方ありません。私は私に出来る事を……為すべきを為すのみです」
諦めが混じったそれは、一種の自暴自棄にも聞こえてしまう。だがそこに見えるのは決してそれだけではなかった。諦め、事実を認め、噛み締め、そして進むことを決めた人間特有の強さが宿っていた。

予期せず飛んできたその発言と表情に、レンが目大きく見開いた。それから眩しい物を見たように目を細める。

「……リーダーちゃんって……強いね……」

「そうですね？……レン様にそう見えるのならば、痩せ我慢をした甲斐がありますね」

(中略)

男の苛立ちを表すように規則的なコンコンという音が廊下に響く。厭味ったらしく貧乏ゆすりを止めない男の姿は、それを見ているだけのアキラにすら男の感情を伝播させてきそうだ。

「……人を呼び止めておいてだんまりたア、マナーのよろしいことで。議員先生さんよオ」

否、既に感情は伝播していた。棘を余すところなく声に生やすアキラに対して、向けら

れた棘をそっくり返す顔付きで議員先生……もとい、ハタノが答える。

「全く……年上に対する敬意というものを知らんのかね、最近の若者は」

「オイオイ。敬意を払われたきゃそれ相応の品を持つべき、という太古からの意見をご存じない感じか？」

売り言葉に買い言葉。ああ言えばこう言う。正に見本市のような治安の悪さに終止符を打ったのは、当然というか呼び止めた方の男だった。

「……キミの態度はさておき。……その靴、どうにかならないのかね」

ンなもんさておくな、なんて嫌味がアキラの頭を一瞬過ったが、それよりも気になった単語があった。

「……靴？」

言葉に釣られて自身の足元を見れば、すっかり履き慣れたスニーカーがあった。ムラクモ召集の際に寝坊したせいで、うっかりジャケットと学ラン(宴会芸で使用済み、クリーニングに出すために干してあった)を間違える、というドジっ子☆をかました

アキラだったが、幸か不幸か靴だけは間違えていなかった。

常から大学に通う際に履いているこのスニーカーは、靴紐も解けずとても走りやすく便利な靴だ。元から多用されていた上に、ドラゴン討伐の前線にも履いて出ているものだから、外見が少々……だいぶ……かなり……とても痛んでいることにさえ目を瞑れば、文句なしの逸品だ。……だがそのアキラが目を瞑る部分に目を瞑れないのが、このハタノという男だった。

「聞くところによれば、十三班とはムラクモでもエース……花形の部隊だそうじゃないか。その部隊に所属しているキミが、そのような貧相な靴を履いていて恥ずかしいのかね」

「全然」

ハタノの言葉を、アキラはつまらなさを隠しもせずに一蹴する。迷いも躊躇いもないその様にハタノが鼻白むなか、アキラは赤い瞳を細めてハタノを見下ろした。

「十三班がどういう評価されてんのか興味もねエし知る気もねエが、俺や双子を祀

り上げてお飾りにしようってのはちょっと違うんじゃないかねエの」

アキラの目付きは悪い。「え、キミ、ヒーラーなの……？ 殺る方じゃなくて……？ まじで……？ ……マジだ……」とムラクモの研究員にデータを二度見された回数是最早、両手でも足りないほどだ。そんなソウマメツキメチャワルイーアキラが意識的に相手を睨み付けければ、当然かなりの迫力がある。先程の治安の悪さが序の口だったように、辺りに乱闘(と書いてオヤジ狩りと読む)の空気が漂う中、怯んでいたハタノが顔色が悪いまま自分の眼鏡に手を当てた。

「ふ、フン。祀りあげようも何も、既にそうなっているから忠告しているのだろう」
「ハ？」

未来形じゃなくて過去形だと？ とアキラが片眉を器用に上げたところで、ハタノが言葉を更に続けていく。

「現状、ドラゴンに対応できるのがムラクモだけである以上、ムラクモの構成員は必然目立つ位置にいる。そしてそのムラクモ内でも更に実働部隊であるキミたち十三

班や、ガトウ隊十班が脚光を浴びる立場になっていてもおかしくはないのではないかね」

非常時は頓に絶るモノを求める人間が増えるからな、とハタノが締め括れば、アキラの喉から濁点交じりの母音が零れた。

確かに考えてみれば、普段からガラの悪いアキラ(ヤンキーと勘違いされる回数多々)や、ガタイが良く顔に傷を持っているガトウ(堅気には見えない)はともかくとして、愛想の良いレンや生真面目そうなリン、朗らかなアオイといった若手組は、しょっちゅう市民に声を掛けられているような気がした。あれも祀り上げの一種と云われてしまえば、そうなのかもしれない。

「……マジかよ……」

自分が気付かない内に勝手に神輿に乘せられていた不愉快さに、アキラは己の髪を乱暴にかき回した。短い茶髪が右に左に乱されていくのを見ながら、ハタノは小さく溜息を零す。自分の価値や能力について外野に好き勝手言われる不快さは、議員であ

るハタノにはよく分かった。ましてやアキラはついこの間までただの大学生だったのだ。耐性があるわけもない。

かといって、娯楽が溢れている常時ならまだしも、ドラゴン襲来なんて非常事態に何かに絶えることすら禁じてしまったら、市民がどうという反応をするかも長年議員をしていたハタノはよく分かる。本来の意味でのアイドル偶像が必要とされている時代なのだ。

……議事堂内にいるからこそ市民の情報が入りやすく、本部に近い位置にいるからこそムラクモの内情も分かる。そんな立場のハタノだからこそ、今このタイミングでアキラに声を掛けたのだ。

「……話を元に戻すでしょう。好悪どちらにせよ注目されている、という現実を今直ぐどうこうできないのはキミも分かっているだろう」

「……まアな」

泣々と云った様子でアキラが頷く。見るな、とアキラが仮に大声で叫び散らかしたとして、それでどうにか出来ないことぐらいは、普通に一般人として生きてきたアキラですら良く知っている。決してまともな文化ではないが、有名人の個人情報も拡散されることが多いのだ。有名人なんて揶揄されるそれは、見られる側になってみれば堪ったものじゃない。

ネット環境が崩壊している今、SNSなどへの投稿は無いとしても、人の口に戸は立てられない。「十三班の草間アキラって人、チョーヤバいんだってー。いきなり叫び出すらしいよ」と噂になって終わりだろう。正に恥かき損。ままならない現状にアキラが舌打ちしそうになったところで、その思考を打ち切る様にハタノが声を上げた。「ならば逆手にとっつてしまえば良い」

「……ハア？」

注目を逆手に取る。その表現に、煌びやかな笑顔で手を振る自分の姿を想像してしまったアキラは、心底不愉快な気分で顔を顰めた。そんな事をしている自分を考えた

だけで昼食が胃から舞い戻ってきそうだ。アリアリと不快感を示すアキラをハタノが鼻で笑い飛ばす。

「キミが想像しているような手段はキミには無理だろう。キミの班の双子や十班の彼女ならまだしもな」

「……ンなこたわあーてるよ」

ずばりと脳内を言い当てられたアキラは、口を歪めたまま赤い目を逸らした。……困みに、見た目はともかく一般常識が欠如しているリンや、人間不信をそこかしこに滲ませるレンも実は不適合なのだが、生憎とアキラもハタノもそれにまだ気付いていなかった。

(中略)

「そして世界は朱く染まる」

「十三班リーダーの本郷リンは、ムラクモ総長補佐である桐野礼文のことが好きだ」

そんな言葉が囁かれ出したのは2020年に起きた竜災害の真っ只中だった。その噂が流れた当初こそ「娯楽が少ない戦時下とはいえ、ナマモノはもっと配慮して楽しむべきでは？」「ぼくのかんがえた さいきょうの としのさカップル、って感じ」等と散々揶揄されていた。だがそれもある意味では仕方がないだろう。噂になった二人の年は、親子までとは言わずとも年齢がかなり離れていたし、それまでそんな素振りは一切なかったのだ。それこそ二人が並んで歩いていたとしても、色恋の香りなど全くしないくらいだ。事務的な匂い一色だった。

そしてなによりも、その噂で名を挙げられたのが本郷リンだったのが、また信憑性を著しく下げていた。なんなら、あの「本郷リン？」と強調語まで付けられていてもおかしくないほどだ。

ドラゴン討伐においてエースナンバーである十三班を率いる若き異能者。戦いに即しているとはとても思えない服を翻し、戦場を縦横無尽に走り回るサムライの少女。自身の身の丈に迫る

長さの武器を振るい、次々と人類の拠点を取り戻す人々の希望の剣。正に「竜を狩る者」の名にふさわしいだろう。敵を屠る刃が人の形を得た、などと称されたことがあるほど、戦闘に秀でた少女だ。表現を変えると、スキルステータスを戦闘に全振りした少女だろうか。これにはマサキ主任もにっこり。

「リン、メディカルチェックをしたいのですが」

「分かりました(躊躇いなくその場で服を脱ごうとする)」

「今直ぐじゃなくて良いから!!」

羞恥心が完全におバグリしたその様に、何度キノノが声を引っ繰り返していただろうか。幾度もストリップショー未遂を見せられたムラクモ本部の人間は、その回数を数えることすらすっかり諦めていた。というかなんなら途中から、キノノがリンと二人きりの時にメディカルチェックを申し込まないのが悪いとまでなっていた。理不尽とはこのこと。社会は大人に厳しい世界だった。勿論それだけではない。

「はい、首です」

そんな端的な言葉と共に、討ち取ったドラゴンの首をムラクモ総長に手渡した事件もあった。ドラゴンの血かはたまた自身の血か。とにかく可愛らしくも豪華な服を赤く染め上げ顔すらも汚したまま、至極当然そうに彼女は首を差し出す。

ここで因みに言っておくと、彼女は決してふざけていたわけでも命を冒していたわけでもない。至って真面目に本気と書いてガチと読むまま、十三班の総力で倒したドラゴンの首を胴体から切り離して持ち帰った。外から見えないようその辺に落ちていた色付きゴミ袋に入れたのは、彼女の中にあつた微かな人間性の表れだろうか。とはいえそのゴミ袋はサニタリー袋でもなんでもない。乳白色のビニール素材からは赤が透けていたし、なんなら首自体も薄っすら見えていた。その辺の詰めめ甘さが彼女の気遣いの限界だったのだろう。

持ち帰った理由はひどく単純だ。その前の晩に草間から、歴史の勉強と称して戦国時代の講義を受けていたからなのと、日暈がドラゴンの素体を欲しがっていると耳にしたからだ。悪意は一切ない。ただし、都庁に持って帰れば周りがどう反応するか、という予測もない。なんなら予測することすら頭に浮かんでいない。ただ単純に、敵の首を持って帰る風習が日本にはあつ

た。日暈はドラゴンの一部を欲しがっている。この二つを融合させ……融合させてしまつて、「今倒したばかりのドラゴンの鮮度は抜群。これから都庁まで直帰するから途中で痛むこともない。よし、首を持って帰ろう」と最悪な結末を導き出しただけだった。

ぶつちやけると、首を持ち帰る風習は今から数百年以上前の話だし、日暈が欲しがっていた素体は心臓……しかも帝竜の心臓のことである。その辺をウロチョロしているドラゴン(暈産型)の首にはあまり意味がなかった。まあ、極一部の研究員の研究は若干進んだようだが。それとはかくとして。

とにかくほぼほぼ、その首に意味はなかったが、露ともそれを知らないリンは意気揚々とゴミ袋片手に帰投した。血塗れのリン(With中身)が透けて見えるこれまた血塗れのポリ袋が都庁に踏み込んだ瞬間の阿鼻叫喚は、今でも避難民の間に語り継がれている。不審者だと判断した警備は警棒片手に威嚇をし、エントランスを走り回っていた子供たちは陰惨すぎるその姿に粗相をし、ご年配の方々は驚きのあまり唾液を誤嚥しむせた。様々な匂いで溢れるその場に、彼女の上司である日暈が緊急召喚されたのは当然と言えば当然なのだろう。

なお、この時に首を手渡された日暈は、悲鳴を上げることもなく淡々とリンに謝辞を述べる。そしてそのまま流れるように横にいたキリノに渡していた。その際、キリノの裏返った悲鳴がその場に響いたが、気に留める余裕のある人間はいなかった。閑話休題。そんなこんなで幾分……だいぶ……かなり……めっちゃ他人とズレた思考をするリンは、あまり市民から好意的に見られることが少なかった。様々なクエストを行う姿を見て少しずつ打ち解けていった人もあるが、それでも多くの市民には倫理観のない危ない子供、という認識を受けていた。そんな彼女に色恋の噂が流れたのだ。そりゃあまあ一笑にも付されるだろう。極一部には、おに口り同好会なる会が結成されたようだが、それもやはり下火になるのは否めなかった。なにせ“あの”本郷リンなのだから。

……と、誰もが思っていた。その日まで。